

〈秋のワークショップ開催報告〉

近世の能登と總持寺祖院

本年は、大本山總持寺祖院開創七〇〇年を迎える記念すべき節目の年であった。總持寺祖院においては、様々な法要・イベントが計画されていたが、コロナ禍ということで、残念ながら規模を縮小しての開催を余儀なくされた。本研究所においては、開創七〇〇年に関連した事業・研究会が開催できないか検討が行われた。その結果、總持寺祖院を取り巻く様々な歴史的問題、所蔵史料の歴史的価値などについて、新たなアプローチを試みる秋のワークショップを行うこととした。

一〇月三〇日、研究会当日は、オンラインにて当研究所と石川県在住の研究者を結び、また聴講者もオンラインにて参加する形式での開催となった。

主要テーマは、「近世の能登と總持寺祖院」とし、三名の研究者に関連する発表をお願いした。それぞれの氏名・所属と論題は以下の通りである。

田中 洋平（淑徳大学人文学部歴史学科准教授）

「總持寺祖院文書を利用した地域史研究の一例」

袖吉 正樹（金沢市立玉川図書館近世資料館）

「總持寺を支えた門前の諸職人」

「総持寺と加賀藩の関係」

次に、それぞれの先生方から頂いた発表要旨を発表順に従って掲載する。

田中洋平先生「總持寺祖院文書を利用した地域史研究の一例」

本報告では、石川県輪島市の曹洞宗大本山總持寺能登祖院文書（以下總持寺祖院史料）を活用した研究の一例として、幕末維新期の蝦夷地における曹洞宗寺院の展開過程を分析した。

本報告の研究対象である蝦夷地では、他地域に比して相対的に近世文書の残存が少なく、文字史料による分析が進んでこなかった。總持寺祖院史料には、この地における曹洞宗寺院の展開過程に関して、その実態を知ることができると史料を含んでいる。

具体的な史料の分析からは、同宗の蝦夷地における寺院展開は、近世中期までに一定程度進んでおり、一旦は止揚の方向に向かっていることが判明する。ところが、幕末期に江戸幕府が諸外国との和親条約・通商条約を締結したことにより、箱館を中心とする地域で開発が進んだ。これに伴って、それまで出稼ぎの場所とされていた蝦夷地に人々の定住が進行し、曹洞宗寺院も同様に数多く建立されていった実態を明らかにした。

また、寺格の面に注目すると、近世中期に建立された寺院は、その大半が規定上、葬送儀礼や寺請を執行することができない僧侶によって営まれる「平僧地」寺院であったのに対し、幕末維新期には、そうした寺院に加え、葬送儀礼や寺請を執行することができる僧侶によって営まれる「法地」寺院であることも判明した。

以上の分析からも例示されるように、總持寺祖院史料は、同寺が永平寺と並んで曹洞宗教団における本山であった

ことから、石川県域のみならず、全国各地の地域史研究を推進し得る史料を所蔵している。今後の利用にあたっては、曹洞宗教団史の解明とともに、全国各地の地域史研究の分析素材を提供し得るものと考える。

袖吉正樹先生「惣持寺を支えた門前の諸職商人」

門前村は、惣持寺の門前に形成された集落で、寺口・寺町とも称された。近世を通じて無高村であり、村御印は発給されていない。つまり、門前村は田地も無く、田畠を耕作する百姓も居なかった。そこに居住する者は、何らかの形で惣持寺に関与していた住人からなっていた。彼らは、表具屋・蠟燭屋・豆腐屋・日用など、惣持寺の多種多様な御用を勤めることを生業として発展してきたのである。

ところが、江戸中期になると、そのような関係にあった門前村の支配方に対し、十村などが関与する動きも見られた。

本発表は、惣持寺と惣持寺の門前町として発展してきた門前に居住していた諸職商人をはじめ、近隣村との具体的な関わりについて、さらに、惣持寺と門前は互いを支え合う関係であったが、その関係に関与する動きもあり、それについても見ていくものである。

石田文一先生「總持寺と加賀藩の関係」

『石川県史 第参篇』（石川県、1929年・改訂版1940年）以後、加賀藩と總持寺の関係についての言及は必ずしも多くはない。『曹洞宗大本山總持寺能登祖院古文書目録』（日本近代仏教史研究会、2005年）の刊行によって、總持寺祖院文書の閲覧・活用に途が拓かれ、今後の研究進展が期待できる。

總持寺祖院文書に加賀藩関係の多くの未刊史料が見出され、四代藩主前田光高以後歴代藩主発給の書状も65点が確

認された。そのほとんど全てが未刊であることから、本報告でいくばくかの検討を試みた。その結果、綱紀書状一通、吉徳書状二通、宗辰書状一通、重熙書状一通、重教書状五通、治脩書状四通の発給年代の推定ができた。この他、光高書状は充所が「如意庵」等總持寺五院が明記されていたのに対し、綱紀以後は「總持寺五院」という充所が変わった。また料紙様式も綱紀までは折紙であったのに対し、吉徳以後は切紙に変わるなど、時期が降るにしたがい薄礼化の傾向が窺えたが、これは藩主と總持寺間の往来が「帰国の祝詞」の恒例化にともなうものと見ることもできるだろう。今回は斉広・斉泰らの書状まで検討は及ばなかったが、次の追究の機会を期したい。

總持寺祖院文書は、藩主発給文書のほか藩年寄や実務担当者らとのやり取りを示す文書が多く遺存することが確認されている。今後『總持寺祖院文書』（仮称）の編纂・刊行を待ち、さらなる研究の進展が望まれるところである。

なお、当日は通信機器のトラブルなどもあり今後課題を残した面もあったが、石川県からの多くの聴講者が参加するなど、このような形式の研究会の可能性を示すことができた。

本研究所においては、今後も祖院調査を継続して行い、その史料の整理・公開の準備を進めると共に、その有用性を広く伝えて行きたいと計画している。